

教祖は、中山家が貧のどん底に落ちきるまで物を施して人をたすけられました。身内以外に種々身上たすけ等の靈教を見せられるようになったのは、安政1年頃、即ち立教から17年頃だったというのが一番古い記録です。そして、稿本教祖伝に「信者が初めて米4合を持って御礼参りに来た」との記述があるのが、安政4年、即ち立教から20年目のことです。次いで、教祖時代の高弟として現在まで名前が残っている最初の信者が出てきたのは、文久1～2年の教祖64～65歳の頃、即ち、立教より24～25年を経た時代なのであります。

これを、現在の我々に当てはめて考えてみますと、

“よふぼくとして、道一条で通る心を定めて、自らの身を削ってひたすら人だすけに励みただけでも、17～18年間は、誰も振り向いてくれなかったし、何ら不思議なおたすけも見せてもらえなかった。家族には反対され、世間からは嘲笑を浴びるばかりで、お供えやお礼などしてくれる人など誰もいなかった。

しかるに、その中、17年経ってから少しおさづけの効能を見せて頂けるようになり、20年目に初めて一握りのお米のお供えがあった。そして、さらに、それから3～4年後に、ようやく一人、二人と頼りになる信者ができてくるようになったという状況だと申せましょう。

よふぼくとして道一条に通ろうとするに際しては、誰しものが、始めに相当な決心をすすると思えます。しかし、20年もの間、“何の成果も見ずに通りきることができるだろうか”と思案しますと、どうでしょうか。世間でも、“石の上にも3年”と言われ、3年もがんばれば何らかの成果があると普通は考えます。しかるに、20年もの間何らよい結果を見ないままに、一方的に人だすけに真実を尽くしきるようなことは、人間には到底なし得ないことではないでしょうか。もちろん、教祖が、凡人の我々にはとても真似のできない道をお通り下さったからこそ、「ひながた」がひながたとして光り輝くのですが、反面、「ひながた」が偉大なものでありすぎれば、人間が真似できるところから遠ざかってしまう。誰にも真似のできない「ひながた」であれば、ひながたの意味をなさないという矛盾が起きるのです。

しかるに、教祖の「ひながた」は、一部の宗教的天才のためだけのものではなく、世の万人のためのひながたです。少なくとも、お道のよふぼくであれば、誰しものがその後をたどることを目指すものであります。そこで、この偉大な「ひながた」と、凡人我々の通る道とのギャップを埋めるべく教示されているのが、次ぎの「おさしづ」なのです。

…十年経ち、二十年経ち、口に言われん、筆に書き尽くせん道通りて来た。なれど千年も二千年も通りたいのやない。僅か五十年。五十年の間の道を、まあ五十年三十年も通れと言えまいこまい。二十年も十年も通れと言ふのやない。まあ十年の中の三つや。三日の間の道を通ればよいのや。僅か千日の道を通れと言ふのや。千日の道が難しなのや。ひながたの道より道が無い。何程急いたとて急いだといかせんで。ひながたの道より道無い。…どんな者でも、ひながた通りの道を通りた事なら、皆ひながた同様の理に運ぶ。…三年辛抱すれば、落ちようと思っても落ちられん。たったそれだけの事が分からん。そこで皆んな一つへの理を寄せてくれるよう。僅か三年の間の事を、長う取るからどんな理も出る。たった

三日の間や。三年の道通れば、不自由しようにも、難儀しようにもしられやせん。  
(明治22年11月7日)

つまり、教祖の50年の「ひながた」を、50年丸々通れと言っても普通の者には無理だろうから、それを3年に凝縮して通るようにせよ。その中でも特に大変な3日間があるが、それを超えて3年間を通りきれば、教祖の50年のひながたを通ったのと同様の理として受け取ってやろうと仰せられるのです。

この千日・3年間というのは、ひながた50年の間のどこかの3年という解釈もできますが、しかし、例えば、天保9年間からの3年間とか、明治20年を遡る3年間などと、50年の間のどこかの3年間を切り取るとなると、貧に落ちきる3年間の苦勞、または、迫害の中をおつとめをつとめきる苦勞の3年間等、それぞれの3年間は味わえても、ひながたの全体を味わうことが難しくなります。それでも受け取って頂けるのでありましようが、ひながたを辿るという上からは、50年全部を凝縮しての3年と考えた方がよいのではないかと思います。

そこで、50年間を3年に凝縮することを厳密に考えますと、冒頭に記した立教より17年は、約1年と8日に相当します。20年目が1年2カ月足らずです。立教より23年というのが、1年4カ月足らずになります。そこから考えますと、道一条を定めて布教して、1年余りを何の見返りも求めず貧のどん底に向かって通りきれば、おさづけの効能の理をあざやかに見せて頂けるようになる。1年2カ月すれば、僅かでもお礼・お供えを持ってきてくれる人が現れる。1年と4カ月が過ぎれば、頼りにできる信者さんを少しはお与え頂けるようになるということです。

しかるに、現実的には、いわゆる道一条を定めて布教を始めても、1年余くらい通っただけでは、なかなかおさづけの効能を見せて頂けません。1年どころか、5年10年経っても信者らしき人をお与え頂けないことが多いのです。それで、「教祖でも、道明けまでに20年近い年限がかかっておられる。徳のない自分たちが、10年やそこらで成果を得ようとするのが、そもそも厚かましい無理なことなのだ」と慰め合ったりします。あるいは、教祖まで考えなくても、「〇〇先生は魂に徳があるからおたすげが上がる」とか、「あの先生はカリスマ性があるから特別だ」と言ったりします。

しかし、それでは、厳しい言い方になりますが、「どんな者でも、ひながた通りの道を通りた事なら、みなひながた同様に運ぶ」という御神言を反故にしていることになるのです。教祖の偉大性や、先人の魂の徳とかカリスマ性を理由に、凡人の自分には結果が出なくても当然だと言うのは、自分たちに都合のよい言い訳なのです。「50年を3年で…」との親神様のお言葉を真正直に受け止めるならば、実際にその通りになるべく努力をしなければならぬのです。また、その通りの結果にしなければ、そこに何が足りないのかを真剣に反省しなければならぬということなのです。

「三年の道通れば、不自由しようにも、難儀しようにもしられやせん。」と仰せになるのは、よふぼくの苦勞を軽くしてやろうとの親心からのものです。しかし、一面そこには、“たすけを急ぎ込む”と言う親神様の思召し召しが現れているということにも、思いを馳せねばなりません。50年の道を三年千日を通る方が、厳しい面もあることを忘れてはならないと思うのであります。